

おとさだ
乙 貞

第245号 通巻42第6号
令和5（2023）年2月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077（585）4397
Mail maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

令和5年を迎え、早ひと月が経ちます。そして本紙発行間もない2月3日には、節分が日本各地で行われることと思います。

豆をまいて邪鬼を払い、無病息災を願う節分の起こりは、文武天皇の慶雲3年（706）に疫病によって多くの人々が犠牲になったことから、疫鬼や疫神を払うために執り行われた追儺に由来するものとされています。以降、宮中行事として慣例化した追儺が節分として民間に広まりましたが、鬼を追い払うための豆をまくという所作や柵に鰯を挿して出入り口の厄除けにする仕来りは追儺にはなく、習俗化の過程であると付けされたようです。また、追儺の斎行は旧暦の大晦日であることから、新暦の立春前日の2月3日頃に節分が行われるようになりました。

毎年この日のニュースとして、「福はうち、鬼はそと」と声高に唱えながら豆をまく映像がテレビから飛び込んできますが、ここ数年はコロナ退散の成就を節に願いながら豆をまかれる方も多いのではないのでしょうか。

それでは、昨年12月以降の発掘調査の近況と開催したセンター事業をお伝えしていきます。

発掘調査だより

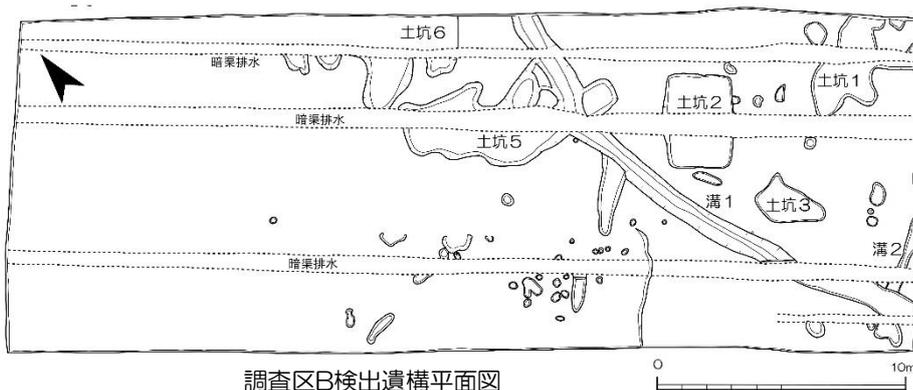
久保田遺跡第1次調査

前号でもお伝えした本調査は1月初旬で終了しましたので、その結果を報告をします。調査対象は建物予定地で、その北寄りに調査区A、南寄りに調査区Bを設定して調査を進めました。調査区Aは、約2mの造成土を取り除いたところで水田の暗渠排水跡を検出、その下層には黒褐色粘土層が堆積していて、削除すると地山の明灰青シルト層が露呈しましたが、遺構の検出には至りませんでした。

調査区Bも調査区Aと同様の層序で、黒褐色粘土層の下層は、淡黄褐色粘土層、黒褐色粘質土層の堆積となり、この調査区からは土坑、溝、ピットを検出しました。



調査区B調査風景写真



調査区B検出遺構平面図

検出した溝1は土坑5と重複し、東に湾曲気味に南北方向に流れます。規模は幅約1m、深さ約17cmを測ります。溝2は東西方向に伸びる溝で、調査区の南辺で断片的に検出しました。

土坑は、土坑2以外は



調査区B全景写真写真

不定形状で、すぐに明灰青シルト層の地山が現れるほどの浅いものばかりでした。

遺物は、調査区Aの黒褐色粘土層からは土師器の小皿、土師質の炮烙が、調査区Bから土師器の甕や皿、黒色土器椀が出土していて、遺構の時代は14世紀中頃から15世紀頃と思われます。

今回の調査の結果、調査地は久保田遺跡の端にあたり、南に向かって広がることが推測できるようになりました。
(畑本)

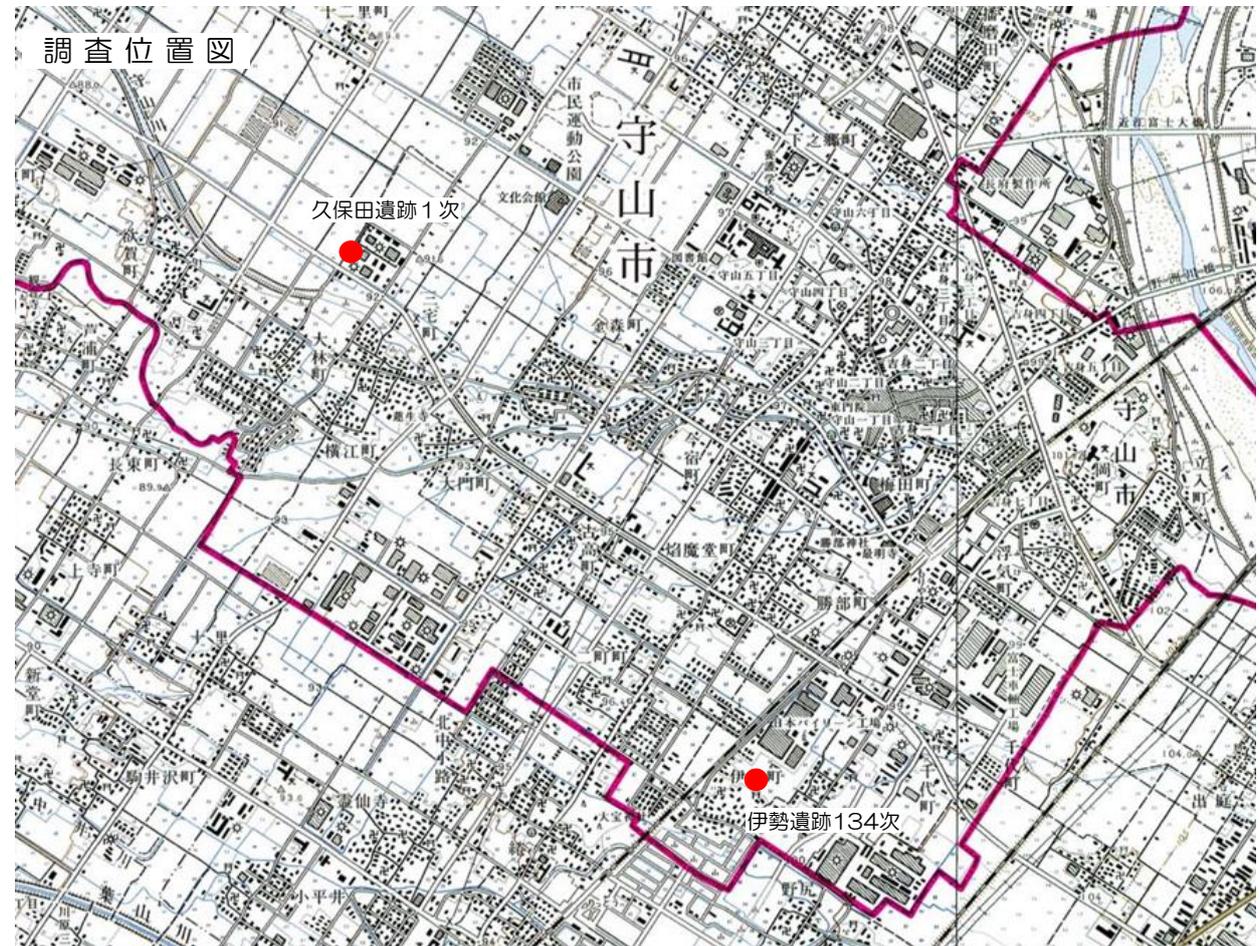
伊勢遺跡第134次調査

伊勢町の皇大神社とバイリーンに挟まれた水田地において、1月17日より宅地造成に伴う発掘調査を開始しました。調査は水田約1,000㎡が対象で、宅地開発の宅地内道路と造成工事の擁壁部分となります。

調査は4つの調査区に分けて行い、現在は最初の調査区1を調査中です。耕作土直下の遺構検出面から溝2条と旧河道の上層で多数のピットと土坑2基、井戸状遺構を検出しています。(堀田)



伊勢遺跡第134次調査風景



「井戸から土器が 吉身西遺跡第8次調査の記憶」の展示を始めました！

1月18日より表題のスポット展示を始めました。
今から38年前、昭和60年に実施した発掘調査で見つかった井戸出土の土器を展示しています。

出土品は飛鳥時代の須恵器の壺や提瓶などが多くを占め、口縁の一部を意図的に打ち欠いています。当時の調査担当者は、「出土土器は井戸を廃棄する際の祭祀に用いられたもの」と考察しています。

日常生活に必要な不可欠な水を得る井戸に対して、感謝と畏怖の念から様々な儀礼があったことを発掘調査は語っています。興味がある方は、是非ご覧下さい。



スポット展示風景

歴史入門講座 閉講しました

12月17日（土）に歴史入門講座第6講を開講しました。「律令祭祀とはなにか 人形代を中心に」をテーマに、中村 智孝さん（〔公団〕滋賀県文化財保護協会）に講演していただきました。

人の罪穢を遷すために使われた、身代わり信仰のツール人形代の起源や、その後に登場した刀や船形、斎串、土馬、人面墨書土器などから、国家祭祀から個人の除災、延命を祈る祓いへと姿を変えていく古代の祭祀の変遷をわかりやすく講演していただきました。

中村さん、ありがとうございました。



講座第6講開催風景

令和4年度 歴史入門講座実施一覧

- 【1講】6/18(土) 木製祭祀具にみる祈り-弥生人の心象- (講)阿刀弘史さん(県協会)
- 【2講】7/16(土) 中止
- 【3講】8/20(土) 「ムラをまもる-民俗行事の視点から-」 (講)佐野正晴さん(甲賀市教育委員会)
- 【4講】9/17(土) 「御霊信仰について」 (講)中本由美さん(龍谷大学講師)
- 【5講】10/15(土) 「禍から集落を護る-勸請板からみる-」 (講)木下義信さん(県協会)
- 【6講】12/17(土) 「律令祭祀とは何か-人形代を中心に-」 (講)中村智孝さん(県協会)

(県協会)は公益財団法人滋賀県文化財保護協会、(講)は講師の略

今回の第6講をもちまして、令和4年度歴史入門講座「いのり、まつり～人々のこころのなか、ムラのなかから見えるもの～」を閉講いたしました。

講座受講者はじめ、多くの皆様からのご要望やご意見も参考にしながら新年度の講座内容を現在企画中です。

令和5年度もまた、歴史入門講座や春季・秋季講演会にご参加いただきますようお願いいたします

新春講演会を開催しました！



新春講演会開催風景

1月21日（土）には、新春講演会「-土偶のヒミツ- 縄文人は何に祈っていたのか」を開講しました。

講師は瀬口 眞司さん（〔公団〕滋賀県文化財保護協会）、1万5千年前から2千五百年前まで続く縄文時代の土偶について、相谷熊原遺跡出土の土偶は「霊的存在を憑りつかせるための依代」で、その後、霊的存在を取り込みながらも精霊像に変容していくという考えをわかりやすく講演していただきました。瀬口さん、ありがとうございました。

埋蔵文化財センター友の会 第3回見学研修を開催しました！

令和5年1月27日（金）に第3回見学会を催行しました。

今回の見学先は奈良県、午前中は、桜井市立埋蔵文化財センターで開催中の特別企画展「桜井市文化財協会34年の軌跡」、昼食をはさんで午後からは、天理市のなら歴史芸術文化村で開催中の「発掘された日本列島2022」を見学しました。

見学会当日は週初めからの今季いちばんの寒波の余波が残り、あいにくの雪降りの日となりましたが、参加した26名は寒いながらも有意義なひと時を過ごしました。



桜井市立埋蔵文化財センターでは、桜井市の埋蔵文化財調査と啓発を担ってきた桜井市文化財協会の解散記念として「桜井市文化財協会34年の軌跡」が開催されています。



桜井市立埋蔵文化財センター見学風景



天理市内での昼食風景



「発掘された日本列島2022」見学風景



「発掘された日本列島2022」開催ポスター

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』やFace Bookからもご覧いただけます！



←歴史のまち守山はコチラから
<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶
<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】昨年来、ロシアのウクライナ侵攻、そして中国の台湾侵攻の危機が相次ぎ、大国の覇権主義の顕在化が全世界を震撼させています。7世紀の東アジアもまた、昨今の世界情勢にもまして予断を許さない情勢でした。中国、大唐の勃興によって、朝鮮半島では日本と誼を通じていた百済や高句麗が滅亡に追いやられます。その予先が日本に向くのは必定との認識があったようです。

当時の中国は、朝貢する周辺諸国の王に対して、王侯の称号を与えて君臣関係を結び支配下におく冊封体制という外交政策を展開していました。この支配体制の根源には中華思想という、漢民族の本貫地である黄河流域の中原華夏は儒教の教えによって理想世界が広がっているが、その周辺の未開国を教化することも天命であるといった、マウントを取ったイデオロギーが横臥していました。当時の日本もまた、倭と呼ばれていた東方の辺境国で、冊封体制の枠組みに包括され隷属関係にあったのです。

こうした情勢下で古代日本の政治選択は対等外交の実現でした。日本が唐との外交テーブルにつくためには、早急に唐と相違わぬ国家体制を樹立する必要に迫られます。国号を中国側の蔑称であった倭から日本とし、君主号も天皇と改称します。唐の政治システムに倣い律令国家を建設するため、唐の文化を余すところなく導入しますが、中華思想までも移入し、中国の周辺国に対して行った支配政策をそのままに、南九州の隼人や東国の蝦夷を中華思想でいう周辺の蛮国と位置付ける政策を採用しました。古代の中国が日本を、そして日本が隼人や蝦夷を差別化する負のスパイラルによって織りなされた歴史を学ばなければなりません。
(馬耳東風)

